ISSN 0917−4729

北海道立北方民族博物館 Hokkaido Museum of Northern Peoples

北方民族博物館だより

—第19号—

第10回特別展 2
発掘調査／北方考古学セミナー 5
博物館実務実習／博物館クラブ 6
News 8

第７回全国生涯学習フェスティバル協賛

「大河アムールの民・ナーナイ」

平成７年７月１日から９月８日まで、第10回特別展「大河アムールの民・ナーナイ」を開催しました。

今回の特別展は、ロシア極東・ウラジオストク市にある私設アムール民族芸術博物館の収蔵資料展です。この博物館は、ナーナイ出身の彫刻家、アナトール・Ｐ・ドンカーン氏らによって３年前に設立されました。館長を務めるドンカーン氏は、大学で絵画と彫刻を学んだのち、ペレストロイカ以後急激に変化するロシアの中で、自分たちの民族文化を残し、後世に伝えたいという思いから、アムール川下流域のナーナイの村を幾度となく訪ねています。そこで彼は、物質文化の保存の重要性を訴えたり、年配者からの聞き取りなどに励むとともに、衣服の仕立てや刺繍（ししゅう）、彫刻などをよくする民族芸術家を、物心両面から支援してきました。

このたびの特別展では、ドンカーン氏がこのような過程のなかで精力的に収集してきた、おもにナーナイの民族資料をご覧いただきました。なおこのアムール民族芸術博物館の収蔵資料展は、昨年６月から11月にかけて平取町にある私設萱野茂二風谷アイヌ資料館（館長　萱野茂氏）でも開催されました。

以下に展示品の概要と、特別展に合わせてウラジオストク市から招聘（しょうへい）したドンカーン氏を講師として開催した講習会、講演会の概要をお知らせします。

■展示：

今回の特別展では365点の資料を展示しました。生業に関する道具類や衣服、信仰にかかわる偶像、ドンカーン氏をはじめとする現代のナーナイの人たちによる工芸品などです。

ナーナイは、アムール川の下流域や松花江の最下流域、ウスリー川の流域に暮らし、漁撈（ぎょろう）や狩猟、採集で生計をたててきた民族です。

漁撈はいまもナーナイの主たる生業です。夏は船で、冬は氷上でサケ・マス、コイ、ナマズ、チョウザメなどを捕らえます。このような川漁の主役は網です。本展では、ナイロン製の網が普及する以前の木綿製網を展示しました。13メートルほどの建網で、浮きには樹皮が、おもりには粘土を固めて焼いたものがつけられています。ナーナイはおもりも自ら作っています。それを示すものに、木製の型取り器があります。粘土の塊を挟み込んで、型を抜くものですが、ヒモかけの溝と所有者の目印が刻まれる仕組みになっています。

狩猟はサケ漁のシーズンが終わる秋から、春先にかけての時期に、森で行われました。シカ、クマ、キツネ、テン、リスなどが対象です。鉄砲が普及する以前の狩猟具は、矛と弓矢、罠（わな）といったものです。本展では、鉄製の矛先、鏃（やじり）、罠の部品などを展示しました。矛には本来３メートルほどの柄がつけられます。民族誌には、しばしば、矛先を保護するための木製ケースにつけられた皮ひもを、腰に結わえてスキーに乗るナーナイの狩人が紹介されています。罠には、対象動物が糸に触れることによって、自動的に矢が発射される仕組みの仕掛け弓があります。アイヌには、アマッポと称するこれと全く同じ構造のものがあります。今回の展示資料の中で、罠に関する道具として珍しいものに「雪ならし」がありました。木製のへらで、テン捕り罠を仕掛けたあとに、仕掛けた人間の足跡を、雪を寄せて消すためのものです。柄には丁寧な彫刻が施されています。植物採集や身の回りのものを収めておくための容器には、白樺樹皮が多く用いられます。とくにフタ付きの容器は、黒く着色された樹皮と樺皮そのものとのコントラストが鮮やかです。

今回の展示の中で、とくに華やかだったものに衣服と壁掛けがあります。衣服には着古したもの、新作のものがあり、いずれにもナーナイ独特の文様が色とりどりの刺繍糸で縁どられています。かつてはもっと繊細な文様だったのに、遠くからでも目立つように意図的に大きな図柄にされ

てしまったと、ドンカーン氏は説明しています。布製の衣服の他に、魚皮を素材にした衣服があります。中国の歴史書には魚皮をまとった人びとを意味する、魚皮韃子（ユピターズ）という呼称が用いられたナーナイでした。サケやコイ、ナマズなどの皮が独特の技術でなめされ、それを接ぎ合わせて一着の服に仕上げられます。襟や裾、そでは刺繍や色布で飾られ、少々残った魚くささを除けば、布製衣服となんらかわるところはありません。現在、この魚皮衣づくりの技術を伝える女性は非常に限られているといわれています。

新しく作られている壁掛けも、衣服同様図柄も刺繍も繊細さを欠いてきていると言われています。そのような中で、今回展示したものは横2メートル、縦1.5メートルほどの大きなもので、しかも描かれている図柄は細かく、長時間費やして製作されたもので、作った女性の物語が込められているとも言われています。

ナーナイは、人間に恵みを与えてくれる、自然界のあらゆるものに霊魂が宿っていると信じ、山や川、海、湖など自然そのものは、精霊がその主をして治めていると考えてきました。この考え方をアニミズムといいます。そしてこのアニミズムと密接な関係をもつ宗教にシャマニズムがあり、シャマンと呼ばれる人がこれにたずさわります。シャマンは霊界と人間界の仲立ちをしたり、病気の治療や予言を行います。シャマニズムは長い間禁止されていましたが、身内に病気が起こった時など、シャマンによって秘かに宗教行為がなされていたと言われています。ドンカーン氏はナーナイとして精霊を信仰していることと、彼自身彫刻家であることから、今回の展示資料にはたくさんの木偶があります。この木偶はシャマンを補助する役目があります。人の形をしたものの他、クマやヒョウ、鳥、カエル、トカゲなど形も大きさもさまざまなものがあります。ナーナイにとって、木偶は霊が宿っている「場所」であり、そのために口元に食べ物を塗り付けるという行為を行いました。

ナーナイはロシアばかりではなく、中国側にも暮らしており、赫哲（ホジェン、ヘジェ）と称されています。今回の特別展では、ホジェンの今の暮らしを描いたビデオ映像を放映し、生き生きとした姿を伝えることができました。また、展示をさらに詳しくご理解いただくために作成した図録には、ナーナイ出身の文学者、ニコライ・B・キレ氏やナーナイの衣服などの文様に注目している小野寺マライレ氏、ドンカーン氏をよく知る武田洋平氏（東海大学）から、玉稿を寄せていただきました。この図録によってナーナイの新たな一面が紹介されたものと思われます。

展示室に用意した感想ノートには「ナーナイの人たちの生活や考え方を知って、私たち日本人はもう少し「謙虚さ」をとり戻すべきではないか」といった内容の記載がいくつかありました。

■講習会：ドンカーンの木彫り教室

特別展関連事業として、ドンカーン氏を講師にした講習会を8月5日に開催しました。伝統的な彫刻技術を取り入れた、ナーナイ風の彫刻品（お守り）を作るというものです。

素材は2センチメートル角、長さ15センチメートルのホウノキ。道具は切り出し小刀と錐、彫刻刀だけです。30人をこえる受講者を迎え、会場は最初から熱気につつまれていました。制作工程を示す印刷物などはなく、ただひたすらドンカーン氏からの説明を聞きながら手を動かすというスタイルです。講師の説明を聞き逃すと、次に何をしたらよいのかわからなくなるのですから、参加している人は真剣そのものでした。

作業は棒状の木の半分あたりから、チェーン状に切り離すのが、何といっても困難を極めたところです。錐を使って穴をあけ、それを目安に、小刀で溝状に刻んでゆきます。大変な集中力と、根

気を要し、あっという間に2時間がすぎていきました。ドンカーン氏は各テーブルを回っての指導に、通訳をお願いした小野寺マライレさんもひと呼吸もおけない状態でした。

チェーン状に切り離したあと、一方はクマの顔をもう一方は足を表現するようナイフで整形してゆきます。できあがったのは、関節に痛みがあるときや、手足の病気のときに使うお守りです。予定時間をはるかに越えて4時間に達する「苦闘」の末に、大半の方が頭の中に描いていた形に近くなりました。これらの一つひとつにドンカーン氏が目と口を入れて完成です。それぞれのお守りの表情は、講師からの「プレゼント」でもありました。

幸いにも、主催側がとくに心配していた怪我(けが)もなく、受講者には実りの多い、講習会だったようです。

■講演会：「ナーナイ・現在から未来へ」

特別展関連事業の第2弾として、ドンカーン氏を講師に、8月6日に講演会を開催しました。

以下にその内容を要約します。

旧政権（ソ連）下にあったナーナイの状況は、「収奪される側」以外の何物でもなかった。伝統的な生業で得られる魚は、コルホーズに吸い上げられ、その代わりとして中央から食料が送られて来た。また、ロシア人民族学者は正しいナーナイの姿を伝えようとはしなかった。さらに伝統的な生活の中で伝え、残してきた物質文化を「古いもの・必要のないもの」という理由で、それぞれの民族学者の所属する研究所・博物館にもって行ってしまった。その代わりとして、ロシア人の文化が「進んだ文化」としてナーナイの中に持ち込まれた。つまり、ナーナイの生活も文化もロシア人によってまかなわれるという状況がつづいてきたのだ。そのような中でナーナイらしさを保つことができたのは氏族の存在である。相互扶助はもちろんのこと、ナーナイの歴史・技術・習慣・タブーなどが長老から若者へと受け継がれてきたのだ。

ペレストロイカ以降、悪弊が取り払われたのは良いが、何をどうしていいのか分からないのが、ナーナイを含めたロシア人の姿である。そのような中にあって、私はナーナイのための博物館を作った訳であるが、当初はナーナイも含め、誰も本気に取り合ってはくれなかった。が、最近はナーナイが理解しはじめてくれている。これが私の一番の励みとなっている。ソ連が解体したからといってナーナイは滅びる訳ではない。しかしかつてはすばらしく大きな文化をもっていた民族なのだから、それを思い起こして自信を持たせたいと思う。

私の回り（世界各地）には、私の活動を援助してくれる人たちもあらわれた。私が今ここに来て日本人に言いたいのは、ナーナイの森を伐(き)って日本に持って行くことではなくて、ナーナイが心豊かになるような援助をしてもらえればと思う。例えば漁撈民・ナーナイは日本人のように育てる漁業を知らない。これに関する技術的な指導などはナーナイの将来を明るくしてくれるように思う。また、私の師であるナーナイの文学者キレ氏は、彼のライフワークとして、ナーナイの民俗のすべてを文字にして残す仕事をはじめている。私はこれをこれからのナーナイのために出版したいし、広く世界の人びと、まず日本人に理解してもらうため翻訳出版なども計画したい。これまでの間違った民族誌から伝わる誤った民族観を変えるためにも。

（学芸課　青柳文吉）

発掘調査
8.15－9.6

北方考古学セミナー
8.10－9.28（全7回）

◆**発掘調査**：北方民族博物館では発足当初から調査研究活動の一つとして遺跡の発掘に取り組んできました。その第1期として、平成3年度から5年度にかけて、網走管内湧別町の川西遺跡において、オホーツク文化期の集落跡を調査しました。

本年度からは第2期の考古学的な調査に臨むことになり、網走市内能取岬とその周辺におけるオホーツク文化と擦文（さつもん）文化の関係の解明と、資料の収集とを目的として調査を開始することになりました。

秋には赤く色付くサンゴ草の群落があることで知られる能取湖。その東側に位置する能取岬のオホーツク海側の一帯は、標高40から50メートルの段丘が切り立った崖（がけ）になって海と接しています。いく筋もの小川が段丘を刻んで海に注いでおり、遺跡は崖近くの小沢に面したところに点在しています。それらは、知られている情報や私たちの事前の分布調査では縄文時代、続縄文時代、擦文時代、オホーツク文化期の遺跡であることが分かっています。

今年度は、美岬（みさき）第2遺跡と仮称した擦文時代の遺跡を調査しました。この遺跡は一辺が約6メートルで方形の竪穴（たてあな）住居を思わせる窪（くぼ）み2か所と、その2分の1ほどの規模の竪穴1か所で構成されていました。私たちは1号住居跡と名付けた窪みの全体と、2号住居跡としたものの一部を約20日間かけて調査しました。その結果、かまどをともなった擦文時代の住居跡が明らかになり、高さ40センチメートルの大型の鉢をはじめ坏（つき）、高坏、小型の鉢、紡錘車などが発見されました。

◆**北方考古学セミナー**：遺跡調査と並行して、発掘体験をとおして考古学に親しむ7回連続の講座を開催しました。名付けて「北方考古学セミナー」。この地域は、自然が豊かなだけではなく、たくさんの遺跡にも恵まれています。そのことをもっと身近に感じようというものです。

1、2回目は、この地域の遺跡の特徴や発掘とはどういうものかなどをお話し、3～5回目（3日間）は現地での発掘体験を行いました。調査地は上記の美岬第2遺跡です。6回目は調査のまとめをおこない成果や感想を述べあったり、土器の復元などをおこないました。また7回目の9月28日にはゲストスピーカーに東京大学（常呂実習施設勤務）助手の新美倫子氏を迎え、遺跡から発見される動物の骨について、実物や標本を手にとりながらその意義についてお話しいただきました。

全日程参加できるということを前提とした受講者は、各回平均、小学生1名を含む7名でした。現地調査日以外は平日の夜にセミナーを開催しました。その理由は、より多くの社会人にこのようなことを認識してもらいたいという意図をもったからです。今回のセミナーの受講者は、みなさん熱心な方ばかりで、予定時間が過ぎて（夜が遅くなって）も話合いがつづいたり、土器の復元に夢中になったりでした。参加者は、大半がこの地域の方でしたが、体験発掘には遠く広島県からこれのみを目的として2名の参加がありましたし、夜のセミナーには東京から参加された方もおりました。

（学芸課　青柳文吉）

博物館実務実習

8.8－8.13

博物館クラブ

8.12、18

8月8日から13日までの6日間にわたり、学芸員資格取得をめざし博物館学を大学で学んでいる学生を対象に、博物館実務実習を行いました。資料の収集、保管、調査研究、展示・教育普及など博物館の基本的な機能についての研修です。3名の参加がありました。以下に実習生のレポートを紹介します。

去る8月8日から13日の間、博物館実務実習をしました。本当のことをいいますと、始まる前はとても不安で逃げ出してしまいたいという気分でした。しかし、いざはじまってしまいますと、他の実習生の方ともすぐ打ち解けることができましたし、毎日しなければならない事を確実にこなしていくうちに、いつのまにか、この六日間は過ぎ去っていきました。実習の内容は、盛り沢山でしたのでいろいろな問題・題材に触れることができて、大変参考になったと思います。ただ、実際のところは六日間という日数は短く、どの実習内容も学芸員の仕事の初歩的な一部分だったように思います。博物館を運営するための各種実務が一週間弱で学びきれないのは当たり前の事であり、働くようになってから、実習期間中よりも、努力しなければならないのだと思いました。今回は実習生という立場であったので、学芸員の先生方が親切に教えて下さいましたし、失敗しても気にすることはないと、おっしゃってくださいましたが、もし同じ立場であったなら、失敗はあまり許されるものではないと感じました。

私にとっては、失敗した、しないに関わらず、この実習は実りのあるものになったと思います。なぜなら、自分自身で見ること、体験することは耳から入る情報だけでは知り得ることのできない情報をもたらしてくれたからです。さらに、私に経験する事の大切さや物事に挑戦する事の必要性を気づかせてくれたようにも思います。また、今回の実習で得たことは、博物館の仕事についてだけではなく、ある種の体験として、私のこれからの人生においてプラスになると思います。反省点はありますが、総合的に見て、納得のいく、楽しい実習になって満足しています。また機会があったら、こういった実習を受けてみたいと思います。

（東北生活文化大学　岩本真実）

当館では現在来館者を対象にアンケート調査を行っています。来館者の属性や利用後の満足度などを把握し、今後の事業内容や広報の方法などについて検討するためです。

博物館には、博物館のあり方、展示の仕方、活動の内容、来館者への対応など様々な課題が数多く山積していると思われる。それは、どこのどんな博物館においてもいえることであろう。このような課題の中には、館で働く学芸員・職員が自覚しているもの、変えていこうとしているものも、もちろんあるだろうが、館の内部の人間では気づかない、考えつかないようなものも多くあると思う。こうしたものを補うためにも、来館者に対するアンケート調査は大変役立つものであり、博物館そして学芸員の仕事のひとつとして、重要なものであると考えられる。

この重要な役割をもつアンケート調査を、今回の博物館実習において実際に行った。来館者へのアンケート記入のお願いから粗品の進呈までの一連の流れを自分で担当したのだが、みなさん快く引き受けてくださった。実習生とはいえ、館の人間の一人として調査を行うということに責任を感じるとともに、短い時間ではあるが、来館者の方々と触れあうことができ、いい経験をすることができたと考えている。また、アンケートをとるために

ロビーに一定時間立っていると、来館者の行動にある傾向があることがわかるなど、新たな発見をすることもできた。

アンケート調査は、一見単純そうなことではあるが、私にとっては非常に学ぶべきものが多かった。今後の博物館そして学芸員の姿勢として、積極的に一般の方々の意見に耳を傾け、採り入れ、ともに博物館をつくりあげていこうという態度がもとめられているのではないかと考える。その一翼をアンケート調査が担っていることは言うまでもない。

（北海道教育大学　岩間賢一郎）

8月12日には博物館クラブ「粘土クラフト・土笛の形をつくる」を行いました。夏休み中ということもあって、多数の参加がありました。なお、この日作った土笛は1週間後の8月18日に道立オホーツク公園てんとらんどで焼きあげました。

北海道立北方民族博物館の教育普及事業の一つに、小・中学生を対象とした「博物館クラブ」があります。この博物館クラブは「ムックリづくり」や「イグルーづくり」「火おこし体験」といったテーマで年に十数回催されており、楽しい体験学習の場として人気があります。先日は、「土笛づくり」をテーマにしてこの博物館クラブが開かれました。

私はこの「土笛づくり」に、「その作り方を参加した子供たちに教える」という大役を担って参加しました。

よく言われる事ですが、これからの生涯学習社会において博物館の果たす役割は多大なものがあると思われます。このような中、こうした博物館クラブによって小さな頃から博物館に親しむという姿勢を身につけられる事は、これからますます進むであろう生涯学習社会において大変重要な事ではないでしょうか。

また、様々な地域に住む、様々な年齢層の子供たちが一緒に楽しみながら学習をするというスタイルは、学校教育では見ることができません。そしてまた、博物館というところは決して画一的ではない、個性を伸ばす教育ができる場だと思います。実際に今回、同じ粘土の塊でも子供たち一人一人の手によってそれぞれに個性的な、いろいろな形へと変化してゆくのをまのあたりにして大変感動し、強くそう感じました。

この博物館クラブのように、博物館側からの学習の場の提供は本当に大切なものだと思います。

今回担った大役をちゃんと果たせたかは疑問の残るところですが、大変有意義な、貴重な経験となりました。あらゆる意味で、子供たちから教えられる事も多々あったように思います。帰りがけ、そんな子供たちから口々に「楽しかった」と言われたときは、本当にうれしく、清々しい気分になりました。

（立教大学　佐多直子）

博物館フォーラム・博物館と地域研究

「アイヌ文化の成立を考える」

日時　11月30日（木）午前10時から

会場　網走市サイクリングターミナル

講師　吉崎昌一氏（静修女子大学）

事例研究発表者

・佐藤孝雄氏（常葉学園富士短期大学）
　「続縄文文化期以降の狩猟・漁撈活動」

・西谷榮治氏（利尻町立博物館）
　「道北地域における続縄文時代の展開について」　他

＊詳細は当館へお問い合わせください。

News

寄贈資料紹介

○魚皮製靴　奈良市の工楽善通氏から、ハバロフスクで収集したナーナイの魚皮製靴が寄贈されました。

執筆者ならびに出版社から寄贈を受けた書籍（7月～9月）

・王　禹浪　1993「金代黒龍江述略」哈爾賓出版社
・渡辺　仁他　1993「平成5年度アイヌ民俗文化財調査報告書」北海道教育委員会
・渡辺　仁他　1995「平成6年度アイヌ民俗文化財調査報告書」北海道教育委員会
・村崎恭子　1995「樺太アイヌ語口承資料2」横浜国立大学

主な来館者

7／5　穂発芽シンポジウム一行　120名
7／28　11都道府県人事委員会協議会一行　40名
7／30　神戸っ子オホーツクステイイン網走一行　50名
8／10　呉　治安氏（中華人民共和国駐札幌総領事）ご夫妻、田　継春氏（同領事）
8／16　岡部三郎氏（参議院議員）ご夫妻

美幌農業高等学校のみなさんが丹精こめて育てたマリーゴールドが博物館を彩っています。

常設展示観覧者が20万人に！

7月26日、開館から約4年5カ月で常設展示の観覧者が20万人に達しました。20万人目となられたのは網走市の田中貞夫さん。田中さんはもう5度も来館されているそうです。先に来館されたのは新潟市の中沢由美子さん、後に来館されたのは川崎市の田村孔明さんでした。これを機にさらに親しまれる博物館をめざします。

その他のもよおし

○7／8博物館クラブ「ナーナイ風ペンスタンドをつくる」
講師：主任学芸員　青柳文吉
○9／9博物館クラブ「ムックリづくり」
講師：学芸員　佐々木亨

小さな森のコンサート

9月9日（土）、（財）山田記念青少年育成財団主催の小さな森のコンサートが当館野外ステージで開催されました。網走小学校金管クラブと網走東小学校リードオーケストラの演奏を500名以上の聴衆が楽しみました。

職員の異動

◇退職（8月31日付）
解説員　本間　恵
◇採用（9月1日付）
解説員　大西友香

観覧者動向　7月～9月

	常設展	特別展
7月	9,978名	2,547名
8月	8,736名	4,813名
9月	5,826名	616名

第10回特別展の観覧者は7,976名でした。

編集後記

■「Q＆A」と「みんぞく・こうこ・はくぶつかんIN HOKKAIDO」はお休みします■発掘現場は林の中。さわやかな夏でした。（笹倉）

北方民族博物館だより
— 第 19 号 —
1995年10月25日発行

北海道立北方民族博物館
〒093 北海道網走市字潮見313-1
TEL 0152-45-3888 FAX 0152-45-3889